2019.11.16 GEWANDHAUS 龍ヶ崎ゲヴァントハウス【オリジナルCDコンサート】

回顧2019年　その2

今年亡くなった名演奏家、アニヴァーサリーの名演奏家を聴く

プログラム

今日は今年を振り返って、これまでご紹介出来なかったアニヴァーサリー演奏家、今年亡くなった名演奏家をご紹介する特集の2回目です。

今年生誕100年を迎えた名ソプラノ歌手のひとり、イルムガルト・ゼーフリートは前回ご紹介しましたが、今回は**リーザ・デラ・カーザ**をご紹介します。

今年亡くなった名演奏家ですが、今回は**アンナー・ビルスマ**、**パウル・バドゥラ=スコダ**、**ミヒャエル・ギーレン**、**ラドミル・エリシュカ**の4人を取り上げ、この名演奏家たちを偲びたいと思います。

（演奏家の紹介は別紙に続く）

今年の通常のCDコンサートは、今回が最後となります。12月は14日の第2土曜日に新先生をお迎えしての「特別講演会&CDコンサート」を開催します。ご期待ください。

一年間ありがとうございました。来年もよろしくお願い致します。

＊＊＊＊＊＊＊

リヒャルト・シュトラウス（1864～1949）：
歌曲集「４つの最後の歌」～ 第4曲“夕映えのなかで”

リーザ・デラ・カーザ（ソプラノ）
カール・ベーム指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
（1953年録音　LP盤より）

カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ（1714～1788）：
チェロ協奏曲イ短調 Wq.170 ～ 第2楽章、第3楽章

ヨハン・セバスティアン・バッハ（1685～1750）：
無伴奏チェロ組曲第1番ト長調BWV1007 ～ プレリュード

アンナー・ビルスマ（チェロ）
トーマス・ヘンゲルブロック指揮ザールブリュッケン放送交響楽団
（1992.12.18　ザールブリュッケン、コングレスハレ大ホールでのLive）

アントン・ブルックナー（1824～1896）：
交響曲第１番ハ短調（ウィーン稿）～第3楽章から、第4楽章

ミヒャエル・ギーレン指揮南西ドイツ放送交響楽団
（2009.1.25　フライブルク・コンツェルトハウスでのLive）

＊＊＊ 休 憩 ＊＊＊

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～1791）：
ピアノ協奏曲第27番変ロ長調 K595 ～ 第1楽章から、第2楽章、第3楽章

パウル・バドゥラ=スコダ(ピアノと指揮)ザルツブルク室内管弦楽団
（1996.4.10　ルガーノ国際会議場コンサートホールでのLive）

アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）：
交響曲第９番ホ短調op.95“新世界より”～第1楽章、第2楽章、第4楽章

ラドミル・エリシュカ指揮大阪フィルハーモニー交響楽団
（2013.10.21　大阪、ザ・シンフォニーホールでのLive）

★ホームページアドレス　http://gewandhaus.sakura.ne.jp/wp/

リーザ・デラ・カーザ（1919～2012）はスイスのベルン生まれ。チューリッヒでマルガレーテ・ヘーザーに師事。1941年チューリッヒ歌劇場に「蝶々夫人」でデビュー。1947年にザルツブルク音楽祭に出演、ウィーン国立歌劇場の一員となりました。1951年には「フィガロの結婚」の伯爵夫人でグラインドボーン音楽祭に出演。メトロポリタン歌劇場、コヴェント・ガーデン王立歌劇場には1953年にデビューしています。特にモーツァルトとリヒャルト・シュトラウスには定評がありましたが、恵まれた美貌と美しく艶のある声で世界的に活躍しました。シュワルツコップやゼーフリート、ギューデンと並ぶこの時代を代表する名ソプラノです。

アンナー・ビルスマ（1934.2.17～2019.7.25）はオランダのハーグ生まれ。16歳でハーグ王立音楽院に入学。コンセルトヘボウ管弦楽団の首席奏者だったカレル・ファン・レーク・ボーンカンプに師事。1957年卒業後、ネーデルラント・オペラの首席チェロ奏者に就任し1959年にメキシコにおけるカザルス国際コンクールで優勝。1962年にコンセルトヘボウ管弦楽団の首席チェロ奏者に就任後、ソリスト、室内楽奏者に転身しました。バロック・チェロの第一人者として君臨、またヴァイオリニストの夫人ヴェラ・ベス、ヴィオラ奏者のユルゲン・クスマウルと弦楽アンサンブル、“ラルキブデッリ”を結成し、古典派からロマン派までの幅広い室内楽レパートリーで高い評価を受けました。柔らかくまろやかな音色と軽快な弓さばきでバロック・チェロ界を牽引した名手です。

ミヒャエル・ギーレン（1929.7.20～2019.3.8）は舞台演出家の父のもとドイツのドレスデンで生まれました。幼少時にアルゼンチンに移住したため、ブエノスアイレスの音楽院でピアノ、作曲、音楽理論を学び、テアトロ・コロンの補助指揮者としてスタートしました。1950年にヨーロッパに戻り、ウィーン国立歌劇場の練習指揮者を経てデビューすると、1960年～1965年ストックホルム王立歌劇場首席指揮者、1969年～1971年ベルギー国立管弦楽団首席指揮者、1972年～1975年ネーデルラント・オペラ音楽　督、1977年～1987年フランクフルト歌劇場芸術総監督、1980年～1986年シンシナティ交響楽団首席指揮者、1986年～1999年南西ドイツ放送交響楽団首席指揮者を歴任。その間ベルリン・フィルやウィーン・フィルをはじめ世界の一流オーケストラに客演し評価を高めて行きました。日本にはNHK交響楽団に２回客演、1992年には手兵南西ドイツ放送響と来日しています。ギーレンは作曲家という事もあり、近、現代の作品を得意としていましたが、演奏スタイルは個性的で、時には賛否を巻き起こすこともしばしばありましたが、それはまた他の指揮者では聴く事の出来ない魅力にもなっていて、常に目の離せない指揮者でした。

パウル・バドゥラ=スコダ（1927.10.6～2019.9.25）はオーストリアのウィーン生まれ。ウィーン音楽院で学び、エドウィン・フィッシャーに師事。1947年オーストリア音楽コンクールで優勝、翌年リサイタルを開いてデビューすると1949年にはザルツブルク音楽祭にデビューして好評を博し、活動の場を拡げて行きました。その後フリードリヒ・グルダ、イエルク・デムスと共に“ウィーン三羽烏”と呼ばれるようになり、世界的名声を確立しました。1953年に初訪米、1960年に初来日して以来、わが国にはたびたび訪れています。またスコダは永年、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトのピアノ作品の研究を行ない、音楽学者としても知られていました。よく歌う、親しみやすい音色で、暖かさを持った音楽を造り出す名ピアニストでした。

ラドミル・エリシュカ（1931.4.6～2019.9.1）はチェコ北東部のズデーテン地方に生まれました。8歳からヴァイオリンを習い始め、ブルノ音楽大学でヤナーチェクの高弟子ブルジェティスラフ・バカラに師事。1969年～1990年カルロヴィ・ヴァリ交響楽団の首席指揮者兼音楽監督を務め、この間チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、プラハ交響楽団などにも客演、「プラハの春」音楽祭にもたびたび出演しています。1978年からプラハ音楽大学で指揮法の教鞭を執り、1996年から2008年まで指揮科教授を務めました。またプラハ音楽アカデミーでは指揮科教授として後進の指導にも尽力し。その中には、ヤクブ・フルシャもいました。2001年から2013年までチェコ・ドヴォルザーク協会会長を務めるなどドヴォルザークやスメタナをはじめとするチェコ音楽やロシア音楽にも精通し、高い評価を受けていました。しかし、東西冷戦時代に西側で活動できなかったことが原因で、わが国でも近年まで広くその名を知られることがありませんでした。2004年に東京フィルと名古屋フィルに客演して初来日すると、たちまち話題となり、札幌交響楽団、大阪センチュリー交響楽団、東京都交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、NHK交響楽団、九州交響楽団、読売日本交響楽団、京都市交響楽団など数々のオーケストラと2017年まで毎年のように共演、「遅れてきた巨匠」と呼ばれ大きな注目を集めました。エリシュカの作り出す音楽は、揺るぎのない自信にあふれたもので、常に格調の高い上質の音楽を聴かせてくれました。